

## はつかよつき とさにつき 二十日の夜の月（『土佐日記』）

『土佐日記』は、紀貫之（872-945?）が935年頃に書いた旅日記です。紀貫之は最初の勅撰和歌集である『古今和歌集』（905年）の撰者の一人で、当時の代表的な歌人でした。この日記は貫之が国司として赴任していた土佐の国（現在の高知県）から平安京へ戻った時の船旅の様子を記したものです。

『土佐日記』の初めには、「男もすなる日記といふものを女もしてみむとてするなり」と書いてあって、この日記は女性が書いたという設定になっています。当時は日記と言えば漢字（男文字）で書かれるのが普通でした。仮名（女文字）を使って和文で日記を書くという新しい試みを成功させるために、このような設定にしたのだろつとされています。

土佐の国の国府を出発したのは、ある年の12月21日であったと書かれています。そして、京に到着したのは翌年の2月16日です。2ヶ月ほどの長旅だったことがわかります。

本教材でテキストとして取り上げたのは、1月20日の記事の一部です。この日、一行はまだ土佐の室津という所にいました。何日も前から悪天候で船を出すことができず、同じ所に止まっていた。船に乗っている人たちは、早く京に帰りたくて、夜も寝られない有様です。「二十日の夜の月出でにけり」という書き出しの文は、そんなふうにながが寝られずに起きているうちに、（夜遅く出てくる）二十日の夜の月が出てしまった、と述べているのです。

海からのぼる月を見て、日記の書き手が思い出したのは、遠い昔、唐の国に渡った安倍仲麻呂（698-770）のことでした。仲麻呂も、海からのぼる月を見て、日本をなつかしむ歌を詠んだのです。仲麻呂の故郷を思う気持ちと、船上の人々の京を思う気持ちが重なり合います。

ほんぶん しゅってん  
本文の出典：

きくちやすひこ いむたつねひさ きむらまさのり こうちゅう やく とさにつき かげろうにつき しんべんにほん  
菊地靖彦・伊牟田経久・木村正中 校注／訳『土佐日記 蜻蛉日記』（新編日本

こてんぶんがくぜんしゅう しょうがくかん ねん  
古典文学全集13）小学館、1995年